

第13号

発行年月：2015年11月



日本医療ソーシャルワーク学会ニュース

目次

- | | |
|--------------------------|------------------------------------|
| 1. 巻頭言 | 8. フィールドワーク |
| 2. 日本医療ソーシャルワーク学会 岡山大会概要 | 9. これからの変化に求められるSWの力 |
| 3. 岡山大会大会長挨拶 | 10. 第7回 日本医療ソーシャルワーク学会
長崎大会のご案内 |
| 4. 岡山大会実行委員長挨拶 | 11. 私のイチ押しの一冊(第2回) |
| 5. 岡山大会事務局長挨拶 | 12. 事務局からのお知らせ |
| 6. 分科会 | |
| 7. ワークショップ | |

1. 巻頭言

日本医療ソーシャルワーク学会 副会長 和田 光徳(兵庫大学)

「医療ソーシャルワーカーの社会的認知を求めて」—私が医療ソーシャルワーカーになった30数年前、こんなスローガンがあらゆる集会で掲げられていた。以後も「医療ソーシャルワーカーの存在や必要性」を訴えるスローガンや学会テーマが、手を変え、品を変え?掲げられてきたが、今や何のための社会的認知か、ぼやけてしまった感がある。その主張は、医療ソーシャルワーカーを「医療分野で働く社会福祉士とするもの」、一方で「社会福祉士と異なる立場とするもの」、「立場ではなく実践体の通称とするもの」と、使う側の都合で色合いを変える。

今、「医療ソーシャルワーカーの社会的認知」は進んだといえるだろうか。確かに「医療分野で働く社会福祉士」は増えたが、資格のない「相談員」も相当数存在し、専門の医療ソーシャルワーカーがいない小規模病院は未だにたくさんあ

る。医療ソーシャルワークの支援は、国民ひとり一人に行き届いているとはいえない。「求める医療ソーシャルワーカー」も、組織・社会から「求められる医療ソーシャルワーカー」も、使う者の都合で修飾される。修飾されても変わらない、修飾されない本質とは何か。「求める医療ソーシャルワーク技能」と「求められる医療ソーシャルワーカーの実践」の一致は、私たちの真摯な実践(ミクロ・メゾ・マクロ)の中で創りだすしかない。そのauthenticity(真なるもの)の声の呼ぶところに進もう。そのために、技能を研鑽し、伝え、支えあう場である当学会の「本質」を、変わることなく大事にしたいと思う。

荒川義子先生没後10年目(平成27年10月4日)の日に。



2. 日本医療ソーシャルワーク学会 岡山大会概要

大会テーマ：「その人らしさを支える」～激動の時代にゆるがぬ医療ソーシャルワーカーの視点～

開催日：2015年9月12日(土)、9月13日(日) 会場：倉敷市民会館

〈1日目〉

- 記念講演：「エンパワメントに寄り添う。ハンセン病の歴史と現場から」
講師：畑野 研太郎先生(国立療養所邑久光明園名誉園長)
- 基調講演：「地域福祉と地方分権の進展」
講師：木村 陽子(日本都市センター参与)
- 報告：「これからの変化に求められるSWの力」
報告者：猿渡 進平(厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活支援推進室)
- 分科会：①医療ソーシャルワーク実践
座長：河宮 百合恵(広島市立広島市民病院)
- ②教育・スーパービジョン・業務開発
座長：室田 人志(同朋大学)

〈2日目〉 ワークショップ

- 1.「ソーシャルワーカーのアイデンティティを抱き続けるために～ジレンマの社会化を考える～」
講師：村上 須賀子(日本医療ソーシャルワーク学会副会長 NPO法人日本医療ソーシャルワーク研究会理事)
- 2.「退院支援から生活支援へ～解決構築アプローチを用いた支援～」
講師：大垣 京子(日本医療ソーシャルワーク学会会長)
- 3.「ソーシャルワーク実践から『貧困』の実態を考える」
講師：下村 幸仁(山梨県立大学人間福祉学部福祉コミュニティ学科教授)
- 4.「ソーシャルワークの価値と倫理に基づくアセスメント」
講師：竹内 一夫(兵庫大学健康科学部看護学科教授 日本医療ソーシャルワーク学会副会長)

3. 岡山大会大会長挨拶

第6回日本医療ソーシャルワーク学会岡山大会を終えて

大会長 石橋 京子(岡山大学病院)

9月12日～13日にわたり倉敷市民会館において開催しました第6回日本医療ソーシャルワーク学会岡山大会は、約230名の参加を得て成功裡に終えることができました。実行委員を代表して心より感謝申し上げます。

前日の長島愛生園のフィールドワークにも33名の方が参加してくださり、ハンセン病療養所の歴史と現状から、人権の問題に向き合っていただけのことと思います。

準備の1年間、実行委員は本当に頑張りましたが、大会をさらに盛り上げ、充実した内容にさせていただいたのは、ご講

演いただきました畑野研太郎先生、木村陽子先生であり、ご報告、ご発表いただいた方々、学会理事の皆様、そしてご参加いただいた皆様の思いと力だと考えます。こうした大会での学びが、MSWの専門性の質と自覚を高めることになるのだということを改めて確信しています。

東京から岡山へ繋がった熱い思いが、長崎でさらに進化することを期待しています。



4. 岡山大会実行委員長挨拶

実行委員長として

実行委員長 廣田 奈美(岡山大学病院)

2014年7月30日、村上市長(当時)と有志数名が集った日から岡山大会へ向けた準備がスタートしました。当初、県内に学会員も数名しかおらず、岡手で開催ができるのだろうか、と不安を抱えてのスタートでした。その後、22名の実行委員会が立ち上がり、私たちが日々現場で感じている現状を共有し、MSWならではの視点や強みについてディスカッションを深め、テーマやプログラムを検討しながら大会当日へ向け

て全員で準備をすすめた過程自体が多くの学びになったと感じています。

大垣会長、村上副会長を始め関わってくださった全ての方の支えによって、無事に岡山大会を終えることができました。ありがとうございます。最後に実行委員長としてこの大会に携わらせていただいた事に感謝して、次回の長崎大会にバトンを繋ぎたいと思います。

5. 岡山大会事務局長挨拶

事務局を担って

事務局長 吉田 知代(岡山協立病院)

岡山大会ではたくさんのご参加を賜り、厚く御礼申し上げます。

事務局を当院の山岡由利香さんと2人で担当させていただきました。日々の業務をしつつの作業は、時にあせり、反省し、心配ばかりの日々でしたが、学会事務局の早良病院の皆様のおかげで無事役割が果たせたと感じています。解らないことがあると、すぐに連絡をしました。すぐにお返事が返って来ます。いつも明るく優しい言葉で励ましてくださいます。たくさんの方の失敗に【しんどいな】と思っても「何とかなる！」とがんばれました。

東京大会でのあったかいおもてなし、参加者の積極的な意見交換、明日のソーシャルワーク実践につながる学びの様子にとても感動し、岡山大会も参加者が元気になる学会にしたと1年間を過ごしました。

実行委員として充実した日々を過ごさせていただき、事務局としての学びも多く、たくさんの方の出会いに感謝の気持ちと幸せを感じています。



(畑野研太郎先生)



(木村陽子先生)



(全体会場)

6. 分科会

分科会 教育・スーパービジョン・業務開発

【座長】 室田 人志(同朋大学)

- 「医療ソーシャルワーカー養成における循環型教育システムの取り組み(Ⅰ)～医療機関での実践例に焦点をあてて～」 【発表者】矢野 忠(姉川病院)
- 「医療ソーシャルワーカー養成における循環型教育システムの取り組み(Ⅰ)～養成校での実践に焦点をあてて～」 【発表者】村岡 則子(長崎ウエスレヤン大学)
- 「岡山県の回復期リハビリテーション病棟における査定による影響～岡山ルールの実態調査を通して～」 【発表者】岩木 勢司(岡山協立病院)
- 「三厚連ウイズにおける障がい者雇用と特別支援学校との連携について」 【発表者】畑中 寿美(㈱三厚連ウイズ)
- 「日独比較によりソーシャルワークの役割を検証する」 【発表者】加藤 洋子(広島文化学園大学・大学院)



座長からのコメント

【座長】 室田 人志(同朋大学)

詳細は学会抄録集に掲載されているので参照されたい。1番目と2番目の大学生とMSWが交流し学び合っていく共同研究の報告と、5番目の日独のMSW専門教育の比較による日本のMSW養成教育の内容に対する提言は、MSWにかかわる専門教育のあり方を考察する内容であった。日本の大学におけるMSW養成教育や社会福祉に関する教育システム課題としての問題提起がなされた。

3番目のリハビリテーションに関わる診療報酬の減算が数

年前より発生している“岡山ルール”の実態調査報告と、4番目の三重県厚生連関連の医療機関において障がい者の法定雇用率の達成、向上を実現した報告は、当事者の視点を基軸として当事者の生活課題を関係者と共有、連携し、当事者が受けられる権利を支える、拡大するソーシャルワーク実践を開発していく報告であった。当事者を支え、変化を生み出す方法論として貴重な示唆を与えられた。

発表者からのコメント

岩木 勢司(総合病院岡山協立病院MSW)

「回復期リハビリテーション病棟における査定による影響」を発表しました。

学会参加も発表も初めての経験をさせていただきました。日々、「おかしい」と思いながら一步を踏み出せなかった「回りハのリハビリ査定問題」を昨年の岡山県MSW協会の中堅者研修で村上先生や大垣先生に背中を押して頂き、仲間と短い時間の中でできる限りのことに取り組むことができました。さわりのさわり程度しかできませんでしたがその中でも本来受けられるはずのリハビリが受けられない方がいる現状は

「やっぱりおかしい」と思い、「いったいその方たちはどうしているのか」と危惧する気持ちを共有しました。SWは今ある資源で何とか患者支援を行っています。しかし、地域包括ケア病棟ができ入棟病名に関しては回りハほど制限がない中で回りハの専門性やリハビリ単位の違いに影響がでていると思います。経営的な話題は出ても患者さんの視点でどうかは動きがありません。SWだからこそ、その視点で今後も活動をしていきたいと仲間と語り合うことができました。変化を生み出すSWとして益々、頑張っていこうと思います。

分科会 医療ソーシャルワーク実践

【座長】 河宮 百合恵(広島市立広島市民病院)

- 「支援困難事例から考える、互助に支えられた知的障がい者のエンパワメント」 【発表者】三谷 勇一(中間的就労研究所、八尾徳洲会総合病院)
- 「医療・介護・福祉従事者向けHIV感染症患者ケア実地研修の効果」 【発表者】首藤 美奈子(独立行政法人国立病院機構九州医療センター)
- 「意思決定困難な社会的問題を抱えた患者の支援を通しての一考察」 【発表者】白神 彩子(岡山旭東病院)
- 「入退院支援におけるMSWの価値観の共有」 【発表者】佐渡 裕紀(広島市立リハビリテーション病院)
- 「支援の過程において、キーパーソンを変更した、がん終末期在宅移行の一事例～家族の間の関係性に着目して～」 【発表者】咲花 彩(市立岸和田市民病院)
- 「MSWとしての専門性を再考した一事例」 【発表者】今林 静(早良病院)



参加者からのコメント

梶浦 卓也(原田病院MSW)

分科会では、MSWの専門性や価値観について、発表者の方々の実際の事例を通じて学ぶことができました。

近年では、病院それぞれの役割の分化に合わせて、患者は状態によって場所を移しながら、治療・リハビリ・療養を行っていくという現実がありますが、その中で患者の居る場所が変わった時に(変わる時)、どの程度患者や家族の気持ちを代弁し、引き継いでいるのだろうかと思直すこと

ができました。

他の職種ではなく、MSWとして支援し、MSW同士が連携する上で、制度の枠組みや、調整だけではなく、患者・家族の気持ちと力に寄り添っていきような支援を目指していくことがMSWの専門性を高めるように感じました。今回の分科会に参加できたことで、私自身の仕事についても一度見直し、日々の業務に励みたいと思いました。

7. ワークショップ

ワークショップ「ソーシャルワーカーのアイデンティティを抱き続けるために～ジレンマの社会化を考える」をコーディネートして

副学会長 村上 須賀子

昨年の東京大会を引き継いだ企画で、まず平林朋子(東芝病院)さんより東京大会での到達点の報告があり、グループワーク「ジレンマの共有、取組課題の決定」に入りました。次に、変化を生み出すコツについて村上が補足をし、平林さんからのアクション事例の報告の後、グループワーク「アクション

プラン作成」を行いました。ジレンマをソーシャルアクションに繋げていくことを目指し、アイデア続出でした。各職場での具体化の報告が待たれます。なお、平林さんのアクション事例を資料として同封いたします。



ワークショップで事例を提供させて頂きました。

香椎丘リハビリテーション病院MSW 宮原 裕之

ロールプレイで患者役をやり、入院時の場面で、「身体の調子はいかがですか?」と聞かれた時に安心感を覚え、自分の事を知らうとしてくれていると感じた事が印象的でした。患者との信頼関係を築くうえで最初の声掛けから重要であることを改めて認識しました。全国のMSWの方々の様々な意見を聞く事が出来、大変刺激にもなり視野を広げることが出来ました。



ソーシャルワーク実践から『貧困』の実態を考える 報告・感想

森田 千賀子(水島協同病院MSW)

このワークショップでは、講演と二つの報告から、私たちMSWが「貧困」をどうとらえ、どう向き合っていけばいいかを考えました。

山梨県立大学下村幸仁先生からは「ソーシャルワーク実践に求められる社会正義としての『貧困』との闘い」のご講演をいただきました。「MSWは日常業務に顕在化するソーシャルワーク実践上の「貧困」に伴う医療保障問題に対して、問題解決のためにその原因を明らかにし、MSWの存在理由を普遍的に問いかけることが求められている。」とし、MSWが「貧困」に向き合うことの投げかけがされました。平成27年度からはじまった生活困窮者自立支援法にふれ、その支援の形は、包括的・個別的であり、アウトリーチを含む早期的・継続的な支援であり、縦割り行政を超えた分権的・創造的な支援であると説明。一方で、任意事業が多く、多くの自治体ではまだ実施すらされていないという実態の中で、その創造的展開が期待されるものと思いました。

広島共立病院山地恭子さんからは、「受療権を守るためのMSWの役割を考える」として、全日本民医連による国民健康保険など経済的事由による手遅れ死亡事例調査概要報告、広島市での国民健康保険の資格証問題への取り組みや、国保44条の活用について報告されました(全国でも要項を持つ自治体は1割程度。フロアの反応からも活用経験のあるMSWは数名しかいなかった)。生活困窮により医療が受けられないという「不正義」に対し、MSWとして取り組んだ経過が1日目の木村陽子先生が話された「変革は現場の小さな問題から」という言葉につながりました。

岡山日赤病院中村朋美さんからは、急性期病院での支援を通して「生活保護世帯ボーダーライン生活者の実態」が報告されました。時間がなく十分な議論ができなかったものの、「生活保護の申請の時期はどうだったのか?」「転院の調整がなぜできなかったのか?」など、MSWとしての支援のあり方を具体的に考えることができました。また、中村さんはマクロな

視点から、今後日本の超高齢化がもたらす経済的保障の問題に危惧を示す一方、本事例のように生活困窮によって健康が損なわれることから、介護予防や健康増進の課題としての生活困窮者へ早期発見・地域での支援の重要性が指摘されました。

両報告は福祉アクセシビリティに関するものであると下村先生からの指摘がありました。報告①の山地さんのいう「受療権の侵害」という不正義に対し、私たちMSWは「社会正義」の視点から真摯に向きあう必要があります。報告②で中村さんが指摘したように、地域でのコミュニティーワーカーとの連携もその一つです。「生活困窮者へのアウトリーチ」という新しい課題がこのワークショップから指摘されました。フロアとの意見交換では地域でのさまざまな支援団体とのつながりもまた、アウトリーチのひとつと考えることができることが確認されました。

福祉アクセシビリティの大きな弊害となっているものとして、生活保護受給者や生活困窮者への、世間あるいは当事者自身、そしてもしかするとMSWなど支援者自身も持っているかもしれない偏見のまなざしがあることを忘れてはいけません。だれもが、憲法25条の「最低限の保障」が当たり前を受けられる社会をめざして、普段関わっている事例を見直し、地域の中での制度や行政のシステムを創造し変革していく、あきらめない粘り強い動きが、今のMSWに求められていると改めて思いました。



ソーシャルワークの価値と倫理に基づくアセスメントで事例提供して

新名 早希子(倉敷スイートホスピタルMSW)

今回のワークショップでは「長期療養中の頸髄損傷患者の自宅退院支援」について事例提供をさせて頂きました。改めて事例を振り返り、なぜアセスメントが重要か、普段自分がどんな視点でアセスメントを行っていたかじっくり見つめ直すことができ、準備期間も含めてとても貴重な経験となりました。本事例は退院に消極的な本人と家族であり、ネガティブな面が目立っていましたが、ワークショップで様々な意見を聞き、本人たちが持っている強みが多くあることに気付かされました。アセスメントはいかに寄り添い、理解するか、想像するかが重要であることを再認識し、MSWにとって要となるアセスメントをこれからはしっかりと行っていきたく思います。



8. フィールドワーク

フィールドワークに参加して記念講演から得たもの

日本医療ソーシャルワーク学会 会長 大垣 京子

「目の前にいる一人の方を愛する」と決意することから、支援は始まる。このようにシンプルで重たい言葉があるだろうか。岡山大会プレ企画「長島愛生園フィールドワーク」に参加したのち、大会初日の畑野研太郎先生の記念講演でいただいた言葉である。畑野先生は「『当事者には自らをエンパワーメントする力がある』と私たちが信じること」「彼らこそ中心である」とも話された。

ハンセン療養所への訪問は2回目である。初めての訪問か

ら抱いていた「なぜ、当事者の方は強いのだろうか?」という思いと近頃感じている、クライアントを支援しているとは思えない、MSWへの疑問を解く鍵が見つかった。

私は、解決構築の考え方を根本にしてソーシャルワークを行っている。畑野先生の言葉は、支援する者にとって共通のものであるが、どのようにすれば実践がその言葉に近づくことができるか考え続けたい。

フィールドワークを企画して

八谷 直博(玉島協同病院MSW)

岡山で学会を開催するにあたり、ハンセン病は避けては通れないテーマのひとつでした。2つの国立療養所を有している岡山だからこそ、参加者のみなさまに実際に療養所を訪れてもらい感じていただこうと、学会前日にフィールドワークという形で企画をさせていただきました。

人権侵害の傷跡とそれを乗り越えてきた入所者の強く、深い思い、ふたつの側面を触れて、感じていただきたく、①歴

史館見学②歴史回廊③入所者の方との交流という組み立てとしました。また、現在の療養所の日常も療養所内での移動の際感じていただいたのではないかと思います。

長島は今、「人権学習の場」として開かれています。SWとして、人間として大事にしなければならない人権について、改めて考えるきっかけになったならば幸いです。

フィールドワークに参加して

西村 直哉(仙台市立病院MSW)

長島愛生園は全国13か所ある国立のハンセン病療養所の中で1930年に全国初の国立療養所として建てられた場所でした。長島という島で昭和63年までは本島からは船でしか行く事が出来ない隔離された施設であったそうです。始めに田村学芸員からのハンセン病の歴史、経過、基礎知識などの説明をクイズも交えながらの説明を受け、その後歴史館の見学を行い、納骨堂に大垣会長から献花もありました。写真や入所者の作品や入所者の手紙などの展示物にふれ、当時を深く感じました。

入所者との交流の機会も設けられ、入所者の人柄もあってか、生活や趣味などざっくばらんな話を聞くことが出来ました。学芸員の言葉からもあった様に、国の過った政策から人権侵害を受けて誤解・差別と偏見に晒されて来た背景を、私達MSWは「理解」と「関心」も持ち、さまざまな侵害を受けている人に対して「行動」をしていく必要性を感じました。関東・東北では大雨の被害が報道される最中、地元を心配しながらも充実した時間を過ごす事が出来ました。

企画して頂いた大会委員の方々に感謝致します。



9. これからの変化に求められるSWの力

猿渡 進平(厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活支援推進室)

大会では、厚生労働省での業務の紹介と医療ソーシャルワーカーに求められていることを報告した。

業務の紹介としては、現在の配属先の業務として、障害者の虐待防止対策業務、相談支援業務についての報告を行った。

次に、私の出向元である福岡県大牟田市の医療法人静光園白川病院での活動を報告した。大牟田市における徘徊模擬訓練を通して、地域住民の互助作りを行い、地域主導型のNPO法人「しらかわの会」を設立し、事務局を病院の医療連携室が担った経過と活動である。地域に住んでいる高齢者や障がい者の日常生活支援事業や、地域におけるサロン事業を通し、地域住民の支え合いが生みだされたというものである。

この活動の成果で、病院からの在宅復帰率が大幅に向上した。患者にとって大変喜ばしいことであるが、病院にとっても大きな効果を生んだ。病院が地域に溶け込み、地域の一員として認められたのである。

地域包括ケアシステムにおいては、住まいを中心として医療と介護、介護予防、そして地域支援を繋ぐことが求められている。医療ソーシャルワーカーは、在宅へ退院する患者に対して医療、介護のみならず、生活支援までも繋いで行くのが、業務の一環だと私は認識している。

現在、多くの医療機関で在宅復帰率の向上が求められている。その為に、1人1人の患者の希望に応えるための、地域との連携は必須だと考える。

「厚生労働省半年見聞録」

東京における生活、厚生労働省における業務、また日々の通勤時の満員電車には、なかなか慣れずに苦勞した。半年が過ぎようやく慣れたような感覚である。



国の責務として1年に1度全国の養護者による障害者虐待、福祉施設従事者等による障害者虐待の件数調査を行い、それを公表することが障害者虐待防止法に記載されている。私は、都道府県・市区町村における障害者虐待事例への対応等に関する状況について調査を実施した。担当者として私の名前を記載した通知を都道府県に発出し、全国から回答が寄せられた時には、これがまさに国の業務なのだと思えた。

また、事務連絡としても、数回都道府県に通知文を発出したが、これは各都道府県から全ての市町村に行きわたる。瞬時に全国へ情報が流れるのである。そのスケールの大きさを改めて実感した。

国会対応関係としては、議員への質問に対応するために、議員会館や国会議事堂にも足を運んだ。会館には、テレビでしか見ない議員の名前があり、ちょっと興奮する思いだった。さらに、今まで医療ソーシャルワーカー業務を行っていたということで様々な勉強会などにも出席させて頂き、貴重な経験をjている。

とにかく、感動の多い半年間であったが、残りの半年は少し落ち着いて見聞したいと考えている。

最後まで様々なことを吸収し、今後の医療福祉行政やMSW現場での実践に活かしていきたいと考えている。

10. 第7回 日本医療ソーシャルワーク学会 長崎大会のご案内

長崎大会大会長 折原 重光(医療法人祐里会姉川病院)

平成28年9月10日・11日に、日本医療ソーシャルワーク学会長崎大会を、長崎県諫早市のウエスレヤン大学を会場として開催いたします。

モナコ・香港と並び『世界三大夜景』に認定され、その後『明治日本の産業革命遺産』として、さらに函館・神戸に並び『日本三大夜景』に認定された長崎は、昨今特に観光地として国内外から注目を集めています。

そのような華やかな賑わいを見せる一方、古くから諸外国との交易・交流の拠点として、我が国の歴史と常に歩み、あるいは翻弄されてきたことも史実として残されており、今に伝えられております。医学・文学・娯楽などの諸外国の文化が伝えられる窓口であったと同時に、国内での様々な騒乱の元もここにありました。先の大戦では広島と共に原爆被爆地

でもあります。終戦直後から米国の指導のもとに公衆衛生に取り組み、医療ソーシャルワークも同時に開始されました。

長崎の歴史とともに、心に残る大会を目指して、実行委員会立ち上げに向けての気運が高まっております。全国の会員の皆様のご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。



(長崎大会への呼びかけ。岡山大会懇親会にて)

被爆していない諫早での原爆体験

長崎大会実行委員長 米倉 康佑(医療法人祥仁会西諫早病院)

平成27年は戦後70年であり、被爆から70年でもあります。

戦争とは、原爆とは、そして平和とは。私たちは学校教育において学習し、さまざまな取り組みを行ってきました。

原子爆弾投下の際「70年間は草木も生えない」と言われていたほどのすさまじい破壊力と影響力を持っていた原爆に、今も多くの方々が苦しみや悲しみを抱えていらっしゃいます。

長崎の地で原爆について学ぶとき、多くの被爆者の皆様の体験談にふれることがあります。今回は大会の会場となるウエスレヤン大学そのものの被爆体験に加えて、諫早市で被爆者の救護に従事なさった方々にも、当時の様子をお話いただくことにしております。

長崎原爆資料館の見学も予定しておりますので、多くの皆様の参加をお待ちしております。

11. 私のイチ押しの一冊(第2回)

変化を生み出すソーシャルワーク—ヒロシマMSWの生活史から 村上須賀子著(大学教育出版)

日本医療ソーシャルワーク学会 副会長 竹内 一夫(兵庫大学)



ふと考えると村上須賀子氏と知り合いになって30年近い時間が流れていた。今回出版された「変化を生み出すソーシャルワーク」を読ませていただいて、氏が文書をホントに細目に溜めていた、又、ナラティブにこだわっていた謎が解けた。広島という

地で、不条理な原爆という未知なるものの大きな傷跡に、医療ソーシャルワーカーとしてかわり、育てられてきた歴史があった。多くの物語があった。その物語は医療ソーシャルワーカーもまた、利用者に育て

られ、利用者と共に人としての成熟を成し遂げていくのだという事を伝えてくれている。人と人を結び付け、人と人を成長させ、そしてそれが医療を、時に政治を変える働きにつながる。その接着剤、またその動きを活性化させる触媒が、ソーシャルワークなのだという事を実感させてくれた本である。ナラティブを大切にしてきた著者だから、なし得た仕事であろう。

今悩んでいる若い現場のワーカーたちに、ターニングポイントにある中堅のワーカーたちに、その立ち位置を示唆してくれる1冊としてお勧めする。

(学会事務局で著者割の1500円で販売しています)

12. 事務局からのお知らせ

1. 今後の地区研修の予定

- ・平成28年2月(日程調整中)九州・沖縄地区研修会「援助技術(中級編)」(仮)
講師:大垣京子 会場:早良病院(福岡市西区姪の浜2-2-50)
- ・平成28年3月にも関西地区で大垣会長による援助技術の研修を予定しています。

2. 会費納入のお知らせ

平成27年度の会費納入がまだお済みでない方は、納入をお願いいたします。
過年度分の年会費納入がお済みでない方も、あわせて納入をお願いいたします。

郵便振込口座記号番号	: 01760-2-140617	納入の際は、通信欄に「平成〇年度 年会費」
加入者名	: 日本医療ソーシャルワーク学会	とご記入下さい。

事務局:早良病院 医療相談室・地域連携室内 〒819-0002 福岡市西区姪の浜2丁目2-50

e-mail:nakagawa@sawara-hp.jp FAX:092-882-1605(直)

*事務局へのお問い合わせは、メールかファックスでお願いいたします。

編集:日本医療ソーシャルワーク学会 ニュース担当 村上須賀子・笹原義昭・村田 朱

発行:日本医療ソーシャルワーク学会(The Japanese Society of Medical Social Work)

印刷:広島中央印刷株式会社

事務局:〒819-0002 福岡市西区姪の浜2丁目2-50 早良病院 医療相談室・地域連携室内

FAX:092-882-1605(直)

URL:http://www.jsmsw.jp

E-mail:nakagawa@sawara-hp.jp

日本医療ソーシャルワーク学会facebook

検索

